

涙の先に新たな自分

第2部 遺児 ⑤

目標へ向かって

体験生かし世の力に

相馬市磯部中野の阿部彩音さん(14)は9月中旬、職場体験学習で市内の相馬保育園を訪れた。「小さな子どもの面倒をみるのが好きなんです。園児に囲まれ、自然と笑っている。でも、外で遊



職場体験学習で、保育園の子どもたちに囲まれる阿部彩音さん(9月15日、相馬市中野の相馬保育園)

これから
——大震災を生きる

べない子どもたちを見る。と悲しくなる。彩音さんは市内の仮設住宅で母(41)、妹(12)と3人で暮らす。海師の父(健一さん39)は3月11日、消防団の副団長として住民を避難誘導中に津波にのまれた。「ババ、どこにいるの?」震災直後、何度も健一さんの携帯電話にメッセージを送った。返信はなかった。「わがままを言

えん人がいなくなると周囲の大人が評するのを、彩音さんは振る舞いながら見せる。将来の夢が、折れそうなる心を支える。9月10日、市の合同慰霊祭で遺族代表としてあいさつし、誓った。「私以外にもたくさんの子どもの親を亡くしたことを知り、自分だけがつらいのではないと思うようになった。私には保育士になる目標がある。勉強を続けて大学に進学し、夢を実現したい」

石巻商高3年の海上直之君(18)は、震災で銀行員の父吉広さん(54)を亡くした。石巻市南浜町の自宅は津波で流され、母千佳さん(46)、兄20、祖母(71)と市内の千佳さんの実家で暮らす。進学が就職か。大黒柱の父を失い、思い悩んだ時期もあったが、吉広さんが望んでいた進学の道を選んだ。吉広さんは直之君にとってよき理解者であり、自慢の存在だった。中学校のPTA会長を務め、「お父さんは立派な人だ」

メモ 東日本大震災を受け、相馬市は独自に震災被害等支援金支給基金を設けた。両親がいずれかの親を失った高校生以下を対象に、1人月3万円の生活支援金を支給している。一般財団法人教育支援プロジェクト「ウモロ」は東北復興や次世代を担うリーダー養成を目指す。岩手、宮城、福島各県の被災した若者が対象。各分野の第一人者との交流、返済不要の大学進学の奨学金提供などを進めている。

ウモロで派遣された。分科会でスピーチの機会を与えられた。「家族を失って泣いた日は数え切れない。でも、震災を経験した自分だからできることがある。世界各國の参加者から大きな拍手を浴びた。自宅は石巻市で、津波

で母(35)と祖母(67)を失った。つぎで何度も胸がつぶれそうになったが、「海外に出て視野を広げたい」と考え、支援事業に応募した。国際舞台での発表を経験した彩加さんは言う。「大勢の人が犠牲になった災害だけれど、一人一人の体験を伝える意味は大きい。親を失って死にたいと話す友達もいる。自分が動くことで少しでも力になればいい」。また、漠然としているが、いずれは海外で働いてみたい、世界各地の人たちと交流したいと思っている。